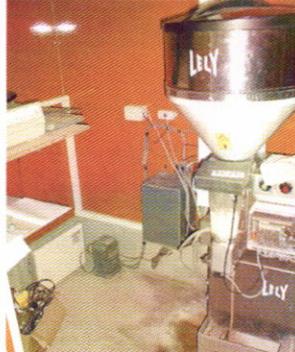


自動ほ乳機の設定

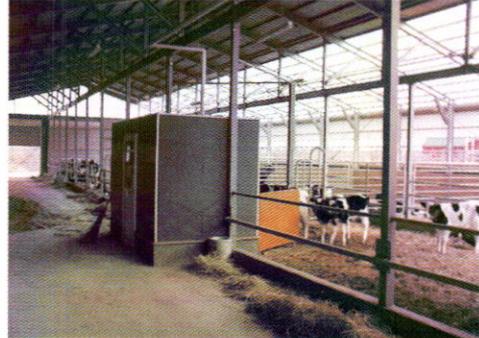
自動ほ乳機が冬期間に凍結しないために、断熱した部屋が必要となります。機器設置部屋は牛床側との高低差を設け、糞尿の侵入を防ぎます。また、洗浄水の排水溝も設置します。



機器の設置部屋は、パソコンや流し台を設置し、粉ミルクの保管スペースとしても利用しています。



凍結防止の為、ヒーターを設けています。



この部屋は3 m×2 mの広さです。ほ乳群のスペースは1群8 m×10 mで、不凍給水器と十分な広さの飼槽を備えています。

ほ育舎のレイアウト例

酪農家で自家産牛をほ乳育成する場合、1群の飼養頭数がそれほど多くならないため、異なった月齢が一緒の群管理となります。この場合、可能であれば1ヵ月令以内と以降の牛を分けた、2群管理とすることが望ましいとされています。

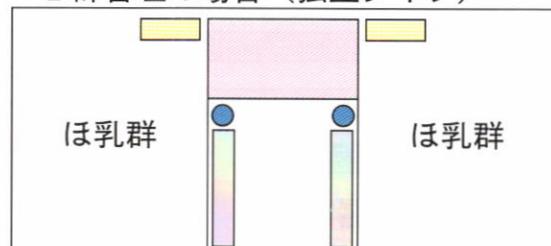
一頭当たりの必要面積は2～3.5㎡/頭が基準となりますが、5㎡/頭程度の事例が多く見られます。

レイアウトは、除糞、敷料管理が容易にできるゲートの構造と機器設置部屋の位置で決まります。

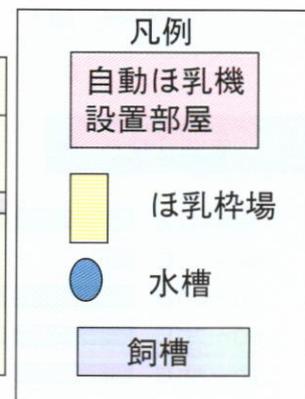
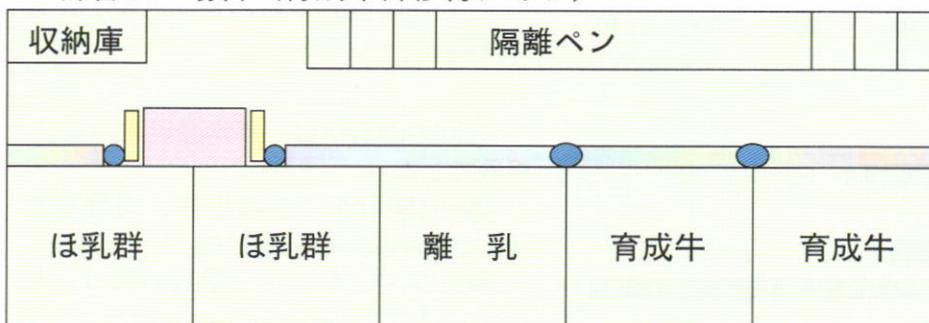
1 群管理の場合（5間幅のD型ハウス等の利用が可能）



2 群管理の場合（独立タイプ）



2 群管理の場合（育成牛群移行タイプ）



ちょっとひと工夫・・・模擬乳首で「おへそ」の吸い合い防止

群飼育の場合、へその吸い合いをして困ることがあります。そこで、模擬乳首を設置し、飽きるまで吸わせてみました。吸い合いが減少したそうです。

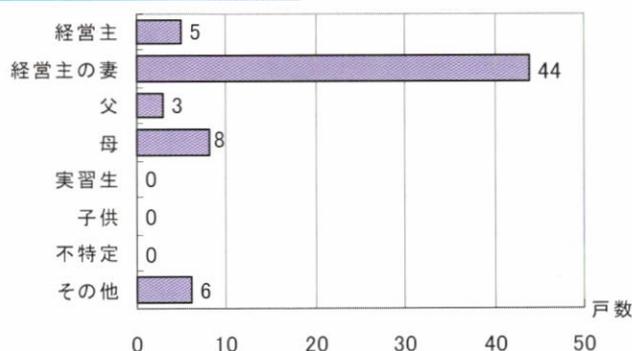


ほ育作業の労働を考える ～労働実態調査より～

搾乳作業と同様に、毎日手をかけなくてはならないほ育作業について、労働実態調査を行いました。負担になっている作業は何か、どんな事に注意を払っているのか、工夫していることは何か…等たくさんの意見をいただきましたので紹介しながら、ほ育作業の労働について一緒に考えてみましょう。

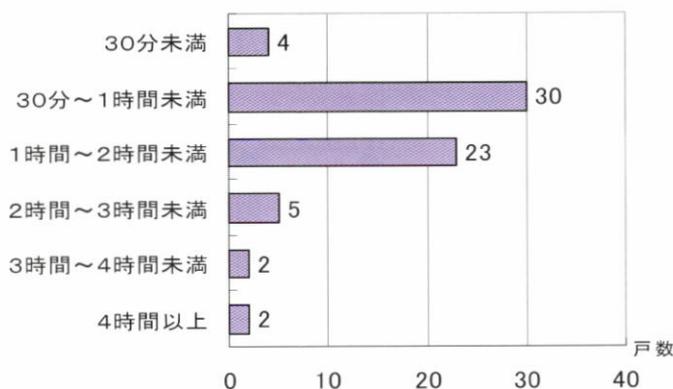
調査戸数 66戸（南根室地区農業改良普及センター管内）
 調査を行った酪農家の平均経営規模 経産牛頭数 70.8頭
 家族数 4.6人（内労働者数3人）

ほ乳担当者について



「経営主の妻」が最も多く、次いで「母」でした。また、「その他」6戸全てにおいても「経営主と妻」「経営主の妻と母」等、女性が関わっていました。
 ほ乳は**女性の仕事**というのが定番となっているようです。

ほ乳作業にかかる一日当たりの時間（管理観察を含む）

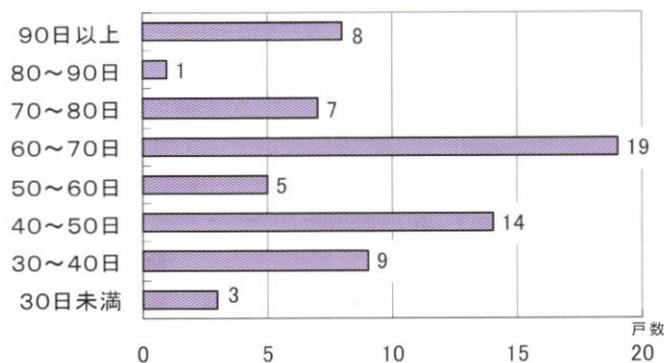


30分未満から4時間以上と1日にかかる時間は、幅広く回答がありました。中でも「**30分以上～2時間未満**」に回答が集中しました。

また、その内管理観察には、「**15分以上30分未満**」の時間を費やしている人が、42%と約半数を占めていました。ほ乳と同時進行で観察を行っている人が多いようです。

ほ乳期の観察や敷料管理も重要なほ育作業の一つです。

離乳までの日数



今回の調査では、**平均離乳日数は56.8日**でした。

20～180日まで各農場で、離乳日数に大きな幅がありました。

現在奨励されている離乳日数は、42日とされています。

最近では、ほ乳期間を短くし、固形飼料を早めに食べさせ、第一胃の発達を促す技術も出てきました。

早期離乳は、労働的にも経済的にも、プラスの要素になると考えられます。